

最先端は伝統にあり

世界を驚かす日本の襦

【退蔵院 副住職・松山大耕師】



若い私かなぜ今日、この会でお話するのか・・襖と私との関係をご理解いただくために・・七分ほどのビデオをまずご覧ください。

（ビデオのナレーション抜粋）

◇ 本堂は四百年前のもので・・狩野了慶が描いた襖絵があります。これを保護する目的と、京都にゆかりのある若いアーティスト・・絵師の方に、新たに襖絵を描いていただいて、今後三百年、四百年先まで残していこう・・というプロジェクトです。

京都は、世界でも有数の文化都市です。でも文化財は朽ちていくものですから、今はいいけど、このさきどうなるんだろうか・・と考えると、心配でして、「今の時期に今の最高の芸術を残しておこう」・・常に何かを残していくことが必要だろう・・と思って、今回のプロジェクトを始めました。

◇ 退蔵院は、今から六百年ほど前に、妙心寺の三代目の和尚様が作られたお寺で、本堂も重要文化財。画家・狩野元信の作った史跡名勝の枯山水庭園もあります。

◇ 絵師の選考は、条件が大変厳しく（条件・三年間のお寺住み込み、絵を描く前に仏教修行や全国行脚などしてもらったこと、など）で・・三十名ほどの希望者があったのですが、最終申し込みは8名。・・その中から選ばれた彼女は、神戸出身で、大学・大学院と六年ほど、京都で学んでいます。彼女が「絶対描きます」と断言する度胸と、思い切った線。・・度胸がないとなかなかできる仕事ではないので・・彼女を選びました。

◇ 日々は、朝起きたら掃除をして雑巾がけをして・・という生活で、信仰の対象の場所ですから、仏教とはどういうものかとか、どういふところに絵を描くのかとかを・・わかっていないと・・間違ったことになっていけません。

◇ 「（絵師）ここにすることが重要だと考えて、住み込みでやりたいと思ったので・・・住み込みでみて、自分が体感できるところが、まずすごい喜びだとおもっていて・・・」 「今までは、写真に撮ってそれを描きおこしていたんですが、本物を見ながら描かないと感動を起こさせないと思っただので、スケッチブックを広げて描くようになって・・・昔の絵師になったような気分・・・乗り移った感覚だったので・・・」

◇ お寺での生活をしている中で、そういう創作意欲を持って新たに取り組んでもらっています。それをを見ていて・・・いいなとおもっています。

◇ 今こういう時代にあつて、大変な災害もありますし、こういう時期にあつて、新たな物を作ることに・・・チャレンジすることは、すごく大事なことだと思えます。

◇ この本堂も、一五九六年に京都府中の大震災にあつて、伏見城も京都の街も壊滅。その翌年に建てられました。当時の人も災害にあいながら、立派なものを建てたいということで、建ててくださったのがこの本堂であり、襖絵です。

◇ 今この時期に、三百年、四百年先のことを見こして、新たなものを作ることにはすごく意義のあることだとおもいます。そして皆さんに将来にわたって感動を与えられるものを、ぜひ作っていきたいと思っています。

◇ この京都でしかできない・・・伝統的などところに新しい芸術を埋め込むという作業をしていけば・・・それはルネッサンスの時代のフイレンツェのように、京都が芸術の都になれるんじゃないかな・・・と夢を持っています。

◇ これだけ、なにができるんだろう？とワクワクすることは、なかなか生きていて体験できません。みなさんもお寺に来ていただいて、どんなことがおきているのか・・・こんな娘がこんなことをし

ているのか！とかを、ぜひ見ていただいて、新しい芸術ができることを楽しみにしていただきたく、よろしく願います。

(以上、上映ビデオから抜粋)

~~~~~

今日の講演テーマ「最先端は伝統にあり」世界を驚かす日本の襖は、襖振興会の方から・「襖の業界は今、落ち込んでいる・家を建てる時も和室をつくらなくなってきている」「襖を買う人がいない・いたとしても、コストパフォーマンスから、安いものしか売れない」・とお聞きし、「このままではどんどん業界が沈んでしまう・何か良い考えはありませんか」と相談を受けて、考えました。

みなさんは「襖の業界」と「お寺の業界」とは違っていると考えておられるかもしれませんが、結構共通するところが多くあります。

「お葬式離れ」だとか「お葬式をせずにすぐに火葬場に行ってしまう」だとか・少子高齢化であるとか。そういうことは、どの業界でも叫ばれていること。

しかし私は、そういうところにこそ、最先端の秘訣が隠されているのではないかと考えます。

今回のプロジェクトも、まさにそれを体現したものであると思っています。今見ていただいたビデオは二年前のもので、・・・2年間、彼女は創作をしてきました。

初期の彼女は、まだ学生さんの表情が抜けきらず、絵のタッチも細かい線が得意で・・・初期の習作は写真のようでした。



半年経って、辰年を迎えるにあたって、捨てようと考えていた古い襖に龍の絵を描かせてみたら・筆をちよつと加えるだけで、アートに変身しています。

云ってみれば、いまお寺の立場は「パトロン」ということです。

捨てなアカンと思っていた襖に、ちよつと筆を加えるだけでアートになる・あのメディチ家というのはこんな遊びをしていたのか！こんなに面白いものか！・と、この辺から気づいてきました。

筆使い、タッチもだんだん変わってまいりまして、立派な龍の絵も描けるようになってきました。

今回のプロジェクトには「色々な意義」がこめられています。順にご紹介すると・まず・「いま日本にある最高の物（素材）を使う」というテーマがあります。三〇四百年その絵を残すためには、そうでないと残りません。

\* 紙

\* 骨組み

\* 筆

\* 墨

これらの素材を作っていたたく工場を、すべて訪問することにしました。紙については、五十嵐製紙さん・越前和紙を、国産の三極を材料にして、特別に漉いていただきました。

これまで本物の越前和紙に描いたことはなかったので、五十嵐製紙さんの工場で、紙と墨をお借りして・越前ですから「蟹」を描かせました。

そこで、紙・「人工の機械で漉いた和紙」と「手漉きの和紙」とを、比べてさわらせてもらったところ・びっくりするほど違うんです。

それも考えていたのとは反対に、「手漉き和紙」の方が卵の殻のようにスベツスベなんです。こんな



に違うものなのか・三〇四百年年たてば、それは差が出てくるなあ・という納得の体験でした。襖の中身・・柾の工場では、釘を打っているところを見せてもらいましたが、その釘は木の釘で、糠でみがいておられました。



今回のふすま絵制作には、舞良戸に絵を描くことも含まれています。その舞良戸の制作現場に行きました。材料は樹齢千年以上の檜を四十年以上寝せたものです。今はほとんど手にはいらぬこの材料を、全国から集めてもらったものです。ここでは職人さんから、「こんな良いものを使わせてもらって・・」とものすごく喜んでいただきました。腕はあっても、仕事はいつもコストパフォーマンス重視のものばかりなので、「一生こんな素材には出会わない」・・ということなのです。職人さんにとっても、三〇四百年残る仕事ができるということに、大変な誇りをもってくださいさっている・・誇りを持って仕事ができるということは、大変重要なことです。

~~~~~

このような素材を、どうしてド素人の娘に提供するのかということですが・・



少し話はそれますが、ベートーベンの「交響曲第5番・運命」という音楽があります。この曲、なんで世界中の誰もが知っているほど有名なんでしょうか？

また宮崎駿のアニメ・
日本の映画監督としては最も世界に認められている・黒澤明。

世界に認められているこれらには、共通した理由があります。それは・皆さん・「見えないものを大切にする」ということです。

宮崎駿の場合・テレビ画面で見える絵・その原画は周りも含めて作画されます、つまり倍以上の面を描きます。すべての場面について・なぜかという、そうしないと、迫力が出ないから。

黒澤明・江戸時代のチャンバラの映画を撮るときに、部屋の中での撮影があると、その部屋のタンスの中には江戸時代の着物を入れています。襖の向こう側にも江戸時代の再現がされています。映画の台本にタンスを開けるシーンがないにもかかわらず・・・そうしないと、役者の演技に迫力が出ないから。

ベートーベンの運命の場合は・いろいろな理由があるでしょう。メロディーがいいからとか。でもメロディーがいい曲はいっぱいあります。その中で何故交響曲5番が、最も知られているのか・みんなの耳にのこるのか？

それは、はじめのところに工夫があります。すべての楽器の音が同じメロディー・リエゾンといいます。そして早い。奏者には大変難しい。

ところが、楽譜を確認していただく和良好的ですが、ジャジャジャジャンのまえに、八分休符があります。音楽が始まる前にある休符・演奏者にとってはさらにやりにくい。リエゾンですから音もずれたらすぐにわかる。ものすごく合わせにくいというえに、頭に八分休符があつて、さらにやりにくい。故に緊張感ある出だしになる。

ベートーベンのすごいところはこのように、聞こえない音で緊張感を持たせているところです。

今回の襖の仕事にも同じ要素を入れました。

私たちが襖を作る現場にいかなければ、襖がどんなに素晴らしいものをわからなかったはず。襖は単に紙が貼ってあるだけだと思っていました。その紙の裏が十一層の紙になっています。一枚の紙の裏側に十一層もの紙があつて、紙を作るのにひと月半もかかつて。その技術は、紙を張り替えるのが前提の技術である・・という。行って見て、現場を見て、初めて分かることです。

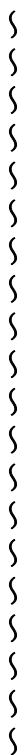
五十嵐さんの紙のすごいところも、それを見なかつたら、襖の裏側にある努力というものをわからなかつたと思います。それがわかると、絵を描くときにもものすごく緊張感を持って、向かいます。そこが大事です。

ただ単に襖にうまい絵をかくというのはダメなんです。永い間保つてその間ずっと愛されるためには、上手な絵はいらぬ。綺麗な絵もいらぬ・・迫力のある：ドーンと感ぜられる・・理屈抜きで「すごいな！」と思わせる絵を、描かなきゃいけないですね。そのためには、自分でそれだけの緊張感を感じなければいけない。

つまりわざと、無名の絵師に日本の最高の素材を提供することによって、そこに緊張感が生まれるようにしています。

そしてもう一つ・・襖を貼るのは京都の物部さんのところをお願いしていますが、そこには多くの若い職人が修行に来ていまして、そのなかから二十三歳の子に貼ってもらいます。もちろん親方の指導はいただきます。

今はこういった本気の襖の仕事のオーダーがなかなか入りません。こういう仕事を若い職人がしなかつたら、襖の技術は廃れてしまいます。もちろん、ベテランの人に貼ってもらったら、安心です。でも技術を伝えるためには、あえて二十三歳の若い人に貼って欲しい・・とお願いしています。大切なことだと考えています。日本の最高の素材を使っている理由が、そこにもあります。



今の様子です。朝おきて掃除をして、雑巾がけをして、庭掃除をして・・・という生活を二年間続けています。
これは使っている筆です。京都の中里さんというところに、絵師の手癖に合わせて、作ってもらっている筆でして、墨は奈良の墨雲堂さんの先代のご主人が趣味でつくっておられた百選墨という素晴らしい墨をいくつか分けていただいて、その墨で磨っています。



絵師の村林のことを、この二年間で何か変わりましたか・・・と聞かれるんですが、一番変わったなあと思うところは・・・掃除がうまくなりました。この掃除というのは・・・「技術が上がった」ことと「キレイにできる」ということとは、同義ではないんです。その場所をきれいにしたいなく、美しく見てもらいたくないなく・・・とか、このお寺に住まわしてもらってありがたいなくという気持ちがないと、いくら掃除の技術がうまくなっても、きれいにはできません。

掃除が綺麗になっていくということは、まさにそういうことです。お寺に住まって、感謝しているからこそ、絵にも表現力にも、掃除にも顕れてきています。掃除の仕方を見ていて、それは分かります。

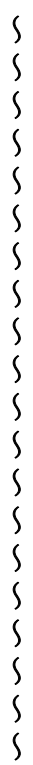
確かに大御所の絵師に描いてもらうのは、安心感があります。いいものができるのは想像できます。

しかしそこには、人を育てるといふ視点がありません。若くて無名だけれども才能のある人に来ていただいで、お寺を通して成長していただく・・技術的にも精神的にも成長していただく。そうすることによって、世の中にすばらしい若い絵師を送り出していく。そこがお寺の大事な役目なのではないかと思えます。

現段階では・・妙心寺は京都で一番大きなお寺（ナゴヤドーム八〜九個分）で、四十六の塔頭（小さなお寺）が集まっています。その中の壽聖院（石田三成の菩提寺）をアトリエにお借りして、その書院と本堂の襖絵を描かせていただいています。朝おきて掃除をしてから、壽聖院で夜遅くまで創作活動をしています。



村林絵師は、みるみる変わってきている。シャープになってきています・・姿も言うことも。すごいなあと思うのは、全部ひとりです・・前例がないんですね。いま行なわれていることは「お抱え絵師」なんです・・それは、三百年、四百年前にあったシステムです。それ以降一度もやられていない・・いわば前例が何もありません。自分で道を開いていかなければいけない。それをひたすらやっているわけですから、これは相当なプレッシャーだとおもいます。そういうことをしていると、言うことも顔つきもシャープになってきます。これはお茶室の絵。



今回のプロジェクトは国内でも注目していただいておりますが、実は海外からも、注目していただいております。スロベニアの大使がお見えになりました。どうして知っていただいたかというところ・・・

今回のプロジェクト・・・「画期的だね」といわれますが、実は「ど真ん中」をやっているんです。《お寺で襖絵を描く》ど真ん中のこと《》をやっているんです。ただ、やれていることはど真ん中でも、手法は最新のものをつかっています。

広報については、広告会社や宣伝などを一切つかってません。最新のやり方・・・インターネットやフェイスブックだけです。

もうひとつの特徴は、バイリンガル（日本語・英語）でやっています。



これだけ（ITとバイリンガル）で、世界に広がりますね。スロベニア大使は、国の友人がこのプロジェクトをユーチューブで知って、「京都ですごいことをやっている・・・あなた日本にいるなら見に行きなさい」・・・とアドバイスされて、おみえになったんです。

最新のテクノロジーを使ってお金をかけてはいらないのに、世界に広がっています。こちらは、ロシアのサンクトペテルブルグの美術雑誌からの取材です。ロシアでも京都が注目されているようです。

自分も京都の観光大使をさせていただいており、年に数回は海外に出て、



プロモーションだとかワークショップだとか講演を行います。京都への注目度が上がっていることを感じています。しかし始めの頃は、あまりうまくいかなかった。ニューヨークでのことですが、京都のことを紹介して、自分のお寺では坐禅や精進料理などを味わえるから是非お越し下さい。とアピールしたんですが、反応がない。そういうことはみんな知っておられるんですね。で、What's New? 何が面白いの? という反応です。

伝統のあるところで何が新しいのか、おもしろいのか、というところに関心があるんですね。ここで言い方を変えて「これまで伝統や言葉の壁があつてできませんでした。このたび初めて、お和尚さんが英語で坐禅や精進料理や書道をご指導できるようになったので、本物の日本文化を体験できますから。」と説明すると、「それはおもしろいね。」と反応がありました。

いまの京都の観光寺院の最大の問題点は「困っていない」ということです。つまり、文化財はたくさんある。ほうっておいても観光客はいっぱい来る。

今はいんです。しかし何百年経ってしまうと、今ある文化財はほとんど残っていないでしょう。退蔵院も、特別公開を行いライトアップもやっています。それも望んでおられる方がたくさんおられるので大切なことなんです。しかしそれははつきり言って「昔の人は偉かった!」ということだけです。私たちはただ単に管理しているだけです。

それだけではやっぱりだめですね。その時代の最高のものを残していく。それがあつて、初めて京都が魅力のある街であり続けていくことができます。

このプロジェクトも伝統の中に New を残す。でも本当は、昔のやり方をマネしているだけです。四百年前にお抱え絵師という技術システムがあつて、そのために長谷川等伯とか俵屋宗達とか狩野探幽とかが出てきた。武士やお寺がお抱え絵師として、パトロン役となつてうまれてきた。という事実があつたんです。ではもう一回やろうじゃないか。と真似ているだけなんです。

でもこのシステムは、本質を突いているものなので「世界に通じるもの」だと、考えています。

《最先端は伝統にあり！》ということとは正にそういうことです。

イノベーション、改革、構造改革とよく言われますが・・・それが目的になってしまっている。よくない場面がいつぱいある。新製品のニュースにも「しゃべるレンジ」のようなものがあるけど、これは本当に必要でしょうか？本質を見抜けることが大切です。

海外進出を果たした一風堂ラーメンの例で言えば、ラーメンが美味しいことによって、世界中に広まざるをえなかった・・・ということでしょう。世界に広めるためにラーメン屋を始めたわけではないです。

いまインドでは、日本のエアコンがほとんど売れない・・・韓国や中国の音のうるさいエアコンの方が売れている。省エネだとか音がしないという売り込みが効いていない。これは、インド人にとっては、音のする方がエアコンが利いていると感じられるためだそうです。

南京錠も・・・日本メーカーの最新の鍵が売れない・・・南京錠の方が売れる。鍵がかかっている気がするから・・・イノベーションも、出来るからというのではなく、本質を見極めていかなないと、効果が上がりません。

つまり、いいものをいいと判断する力・・・直感・洞察力が求められます。その先に、グローバルイズムというものがあると感じます。

京都のお寺でも、最近英語をしゃべる僧が増えてきています。しかし先日、「英語ができる僧が増えているけど、仏教を語れる僧がいらない・・・」と指摘されていました。それではダメです。全くグローバルゼーションにはならない。本質がわかっていないと、グローバルでもなんでもないんです。ただ英語が出来るだけです。

~~~~~

表紙に紹介した絵は、村林絵師の最近の作品です。七十mぐらいの巻物の朝顔を描いています。こちらは、百mぐらいの巻物に雀・最初は百羽ぐらいを、というのが五百羽に。目をつぶっても眠っていてでもかけるぐらいに・・反復練習しています。



反復練習がものすごく大事だと思います。日本の教育がどうのこうのと言いますが、日本の教育の良さは、そういうところにあります・ドリルとか型を反復練習すること。昔ながらの良いものを、結集したものをやっていくということは、本当に大事なことです。村林もこのように反復していますが、テクニクではなく数が重要なんです。やった作業量が大事なんです。

さて最後にこのプロジェクトの意義をまとめておきます。

まずひとつ目は、お寺は人を育てる場所です。お寺を通して、世界に通じる人を育てていく。そこが一番大事なところですよ。

お寺の世界もだんだんかわっています。一番大きな動きが、檀家制度がだんだんなくなっています。家の形態が変わっています。お寺もそれに合わせていかなければならないんですが・・。

お葬式。もともとお葬式は、江戸時代の中期ころまでは、お殿様とかをのぞいて行われませんでした。ではそれまで、お寺の役割はなんだったかというところ、人を育てることでした。

ふたつめ・皆さんは、新しいものを作るために壊している。名古屋の街もそうですね。しかし私たちは全く違う・残すためにつくっています。今までの文化財を残すために創っているんです。こういう視点が、将来にわたってずっと残っていくものを生み出すために必要と思っています。

そして、技術や匠の技を、次世代につなぐ（みつつめ）。

よつつめは、アーティストの生き方を提案しています。今、音楽家にしても、美術家にしても、ア

テイストが生きていくのにはなかなか難しい時代です。今回、若いアーティストに沢山お目にかかりました。みんな才能がものすごくあります。しかしそれだけではなかなか生きていけない。今まではヨーロッパのスタイル・どこかのアトリエに属して、絵を売って・著作権で、有名になっていくということでした。そして絵は、出来高払い。

しかし今回の行き方は違います。お抱え絵師とは、生活をまるごとこちらが面倒をみる。住むところも食べることもねるところも、全てこちらが面倒をみます。

サラリーマンの初任給ぐらいのお給料を支払っています。ですから、お寺の職員になるということですね。絵も描きますが、忙しい時にはお膳を運んだりお掃除もするし、抹茶も立てたり。お寺の仕事をちゃんとやりながら、生活を保証された中で、創作活動をしてもらいます。

これはアーティストにとってもお寺にとってもいいことです・いいシステムがあつたんですね、昔は。

《困ったら、寺に住みこめ！》という生き方を、若いアーティストに提案できたのではないか？・とおもってます。それも大きな意義だろうと思います。

そしていつつめ・「お寺のあり方」を世に問うということ。お寺の問題は先程も触れましたが「困っていない」ということです。ただ単に、在るものを見せているだけです・それだけじゃダメですね。

今回の襖絵プロジェクトを始めた本当のきっかけですが・学生時代にイタリアのフレツェに行つた時、路地裏でオッチャンが靴を作りながら売っていました。結構いい値段・五万円とか十万円します。でも商売が成り立っているんです。

なんでこのオッチャンが路上で結構高い靴を作って、商売が成り立っているのか？

見ていると、皆さん足を止めて・そのオッチャンと会話をしています。そのオッチャンがどんなに苦労をして靴を作っているのか・その靴がどれだけすばらしいものなのかを、みんな目の当たりに見ているんですね。そのオッチャンの仕事ぶりを見て、信頼・評価しているんですね。・「これ





襖というものは・・素晴らしい技術です。

先日、国際インテリアデザイン協会に、見に来ていただきました。いま世界でも、襖が注目されているということです。襖はスライドさせて横にあげますが・・こういう戸は中国の一部とマレーシアにあるらしいですけど、これだけ洗練された開き戸は日本にしかないそうです。

ドアというのは、押して入る・・そうすると、人（相手）の空間にプッシュしてはいることになる・・そのおこがましきがある。開けるといふことで、扉の動く扇形のスペースがデッドスペースになる・・こうした点を、会長は指摘されました。襖であれば、部屋を広く使えます。

日本では、襖はだんだんダメになるとされていますが・・日本酒や日本料理が世界で注目されているように、ふすまもこれからだんだん世界に広まっていく・・まさにそういう時でありあます。このような本質をついていければ、襖は世界に広まっていくはずですよ。

私は大学の時に農学部でお酒の研究をしていました。それは、お酒を通じて日本の農業が世界に広がってあげばいいな・・と選んで選んだんですが、このまえフランスに行った時。フランスに妙心寺のお寺があり、その総長の付き人として、田舎でミシュランのレストランに入った時のことですが、お酒の選択で困ってしまいました。家族連れが入ってきて「純米吟醸」と頼んでいました。「そんないいのか！」・・とびっくりしました。日本酒も世界でものすごく評価されています。

襖も世界にこれから広がっていくと思います。

日本庭園・・退蔵院の庭も有名ですが、その庭をつくっている方の息子さんの今の仕事場は、オマーンとウクライナだそうです。いま世界中で日本庭園を作って欲しいという方がたくさんいらっしゃるんだそうです。

退蔵院が襖をやっているそうだといいこと、このあいだニューヨークに住んでいるインドネシアの石油王から、「別荘を作りたい・・全部和風建築にしたいので、襖絵を作りたい・・と注文が

入りました。そんなことがあるのか・・・と思いましたが、これからそういう時代になると思っています。ですから、襖市場は収縮していると思われると思いますが、世界には思いつきり開けています。自信を持ってやっていたきたい・・・と私はそう思います。

「最先端は、伝統にこそ、存在します。」・・・皆さんのやっていることはたいへん尊いことです。そして、ふすまは本当に「本質」だとも思います。

自信を持っていただいて、ただ・・・私がやっているように、≪その本質はかえないけれども、その伝え方は変える必要がある≫と思います。例えば、私の場合でいえばフェイスブックを使う、インターネットを使う・・・というようなことです。

先日、表千家のお茶の宗匠とお話をしたら「伝統をつなぐということとは、中身をそのまま次につなげること」だと言われました。中身がくさった水かどうか・・・それは自分が腐っていると考えてしまうかどうかであって、中身はどうであれ、そのままの形を次に伝えること・・・なんだそうです。ずっとつながってきたものを、時代に左右されずに、次に伝えていくことが、伝統をつなぐということです。

ただ、伝え方にはいろいろある。その中から一番伝えやすい形で、中身は変えずに、伝えていく・・・それが伝統だということです。

ふすまの場合も、中身を変えずに、どうやってうまく伝えていくのか・・・そこをぜひ工夫していただきたいですね。

いろいろな業界が・・・暗い雰囲気ではありますけれども、ぜひ日本の良さ、素晴らしさを継いで頂いて、自信を持って「世界に通じる最先端・・・伝統にこそ最先端がある」という意識を持っていただいて、これからも素晴らしい日本文化の伝統を、次世代、そして世界に伝えていただきたいなあと、思っています。





【京都 臨濟宗 妙心寺・退蔵院 副住職…松山大耕 師】

日本襖振興会 第一回会員大会（記念講演）

（名古屋 二〇一三年八月）